

はじめに

東アジア海域文化の交流と展開という新しい視点より日本江戸時代の儒学思想を眺める際、17世紀前半に活躍した朱子学者林羅山は、その代表的人物であると言える。

江戸初期の日本と南宋時代の中国とは、時間・空間を遠く隔てている。林羅山は朱子学を理解するにあたり、後世の人々の手が入った“二次資料”、すなわち異なる時代、地域のさまざまな立場・観点に濾過された後の朱熹の言論に依拠するしかなかった。このような“二次資料”の主なものには以下のようなものがある。すなわち、中国南宋以降の各時代と朝鮮朝の朱子学者たちが伝えた朱熹学説とそれに関連する内容解説、明代に政府によって編纂・出版された『四書五経大全』『性理大全』の中に引用された朱熹の著述、朝鮮の儒学者たちが編集・著作した『朱子書節要』などに抜き書きされた朱熹の著作、またそれ以前に入宋した僧侶或は海上貿易活動によって日本にもたらされたいくつかの朱熹単行書などである。こうした歴史的事実は、林羅山思想と朱熹学説との間に差異を生じさせた重要な要因の一つともなった。しかしながら、一次資料でなく理解に不利にみえるこうした要因は、必ずしも“朱子の本意”を完全には守らなくてもよいという可能性を彼にもたらし、これら右の思想的素材を総合的に参照し、自身の必要に基づいて自由に取捨選択して利用させることになった。林羅山の朱子学思想は、こうした“距離”によってこそ創造刷新の機会を獲得したと言うべきであろう。

本稿は、心と人間の本性及び情との関係という問題を扱いつつ、朱熹、李退溪との比較研究を通して林羅山における心・性・情の関係論の具体的な特徴を把握し、また、東アジア儒学史における林羅山思想あるいは日本朱子学の位置を革新し定めるための事例を提供することを目的とするものである。